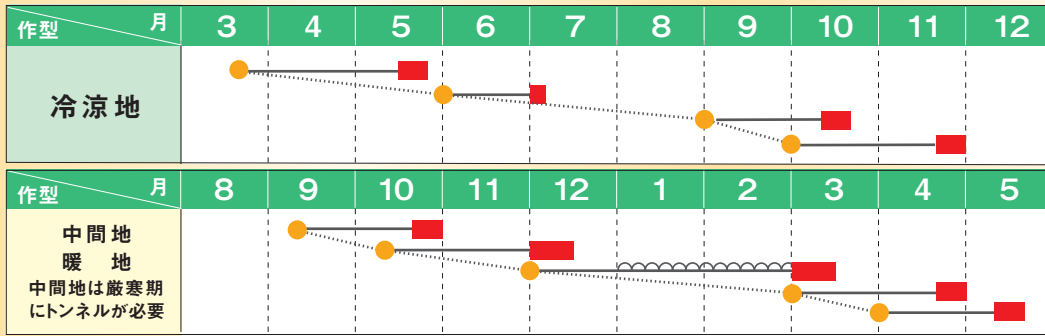


# タキイのホウレンソウ栽培マニュアル



## 適期表記説明

- : タネまき
- : 育苗期
- : 生育期
- 〰 : トンネル
- : 収穫期
- : 適宜播種可能

## ホウレンソウの発芽と生育

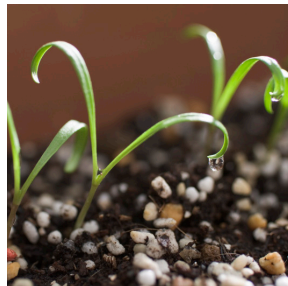
冷涼な気温を好み、高温には弱い

発芽適温 15~20℃

発芽は4℃までは可能です。25℃以上では発芽率が低下し、35℃以上になると発芽できなくなります。

生育適温 15~20℃

低温に強く、-10℃にも耐えますが、耐暑性は極めて弱くなります。25℃以上では生育が抑制され、病害（立枯病、根腐病）が多発します。平均温度5℃で生育が止まります。



↑ホウレンソウの発芽

### 【ホウレンソウの種類】



東洋種



針種

丸種



西洋種

一般に針種（角種）で、葉肉が薄く、欠刻が3段以上と多い。葉柄の元や根は濃赤色。葉質がよく、土臭が少ない。長日に敏感で抽苔が早く、秋まきに使用される。（播種時はトゲに注意）

### F1（一代交配種）

東洋種と西洋種の交配によって育成。一般に生育が早く、葉肉が厚く、収量が多い。抽苔は安定したものが多く。

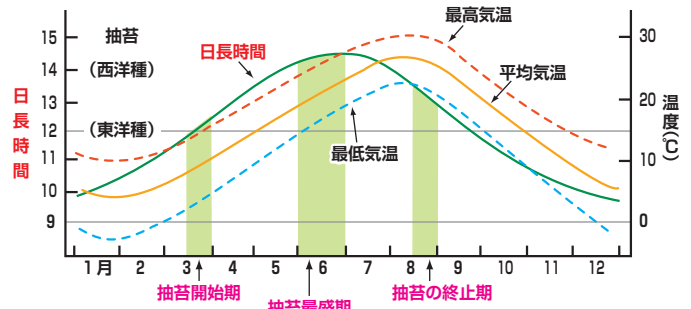
一般に丸種（針種もある）で、葉肉厚く、欠刻が少なく、ちぢみのあるものがある。葉柄の元や根は淡赤色、土臭が強い。長日に鈍感で抽苔が遅く、春まき、夏まきに使用される。

## ホウレンソウの花芽分化と抽苔

ホウレンソウは雌雄異株であり、その割合はほぼ1:1に分かれるが、中には両性花を併せ持つ株もある。生育は雌株が旺盛ですが、抽苔は雄株が早い傾向になります。



【花芽分化と抽苔】長日条件により花芽分化しますが、幼苗期の低温でも促進されます。積算日長は450~500時間といわれています。播種後15~30日で花芽が形成され、日照時間の長短の影響を受けることは少ないのですが、分化後の花芽の発育（抽苔、開花）には長日の影響が顕著です。日長が13時間以上あると抽苔が早く進み開花します。6月まきが夏至を経過するので一番危険です。市街地の栽培では、街路灯や夜間照明などで抽苔を起こす場合があるので注意します。また不良条件（高温、乾燥、過湿など）での栽培では、抽苔しやすくなります。



### 日長が長くなり温度が上昇する

長日に感応して花芽の発達・抽苔がはじまり、温度の上昇によりさらに促進されます。春まき、夏まきには長日に鈍感な品種が使われます。

### 日長が短くなり低温となる

低温感応により花芽分化が促進されますが、短日下で花芽の発達はおさえられ、日長が長くなるまで栄養生長をつづけます。

### 【酸性土壌と土づくり】

酸性土壌に極めて弱く、中性から弱アルカリ性を好みます。最適pHは6.3~7.0とされ、pH5.5以下の酸性土壌では生育障害がみられ発芽が悪く、また発芽しても子葉が小さく葉先は黄化し、根は先端から褐変し枯死するか、本葉2~3枚で生育が止まります。

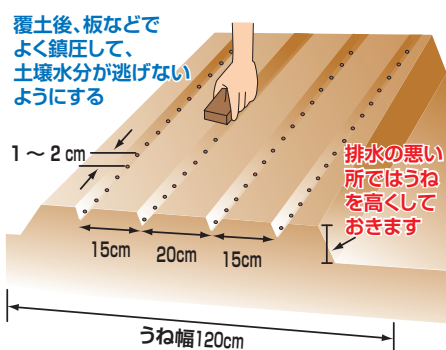
pH6.5を目標に、播種の1カ月くらい前に石灰質資材を施用します。また、完熟堆肥を10㎡当たり20kg程度施します。醗酵鶏ふんなどの有機質肥料をタネまき直前に施用すると、タネバエの発生を助長してしまうので、堆肥と同様、1カ月くらい前に施します。

## 播種

### 【一斉発芽が大事】

ホウレンソウは早く一斉に発芽させることが上作の基本

1cm程度に一定の深さのまき溝を切って、種子を1~2cm間隔くらいにまき、覆土をして鎮圧します。本葉2~3枚までに最終間引きを行い、秋まきは株間を5cm、春・夏まきは株間を7~8cm程度にします。密植すると葉色が淡くなって葉肉が薄く、株張りも悪くなります。



### 春まき栽培ポイント

生育前半が低温下にあたるため、保温資材を活用して初期生育を促します。ベタかけ資材などを利用すると発芽や生育がよくなります。彼岸を過ぎると日長が長くなり抽苔が問題になるので、晩抽性品種を栽培します。高温・乾燥・肥料切れなどは抽苔を促進するので、注意が必要です。



## 施肥量

元肥の目安として10㎡当たり成分量で秋まきチッソ200~220g、リン酸200~230g、カリ200gを施用します。春まき・夏まきでは生育が早いチッソ150g、リン酸200g、カリ150gとします。基本的には全量元肥とし、完熟堆肥とリン酸分を十分に施して根張りをよくするようにしましょう。

## ホウレンソウの生育

ホウレンソウ生育ステージ別  
ポイント (秋冬どり)

生育適温 15~20℃  
(冷涼な気温を好み、  
高温には弱い)

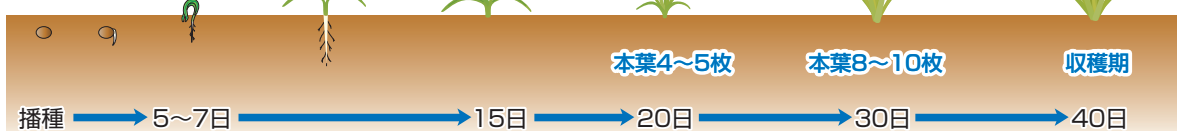
温度が高い時期は  
苗立枯病に注意

葉色がうすい場合は、追肥を10㎡当たり  
チッソ成分で30~40gを施用するとよい

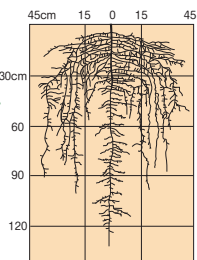
収穫の1週間前から灌水を  
ひかえると品質が向上する

一斉に発芽させること  
が栽培期間の短い  
葉物野菜では重要

発芽温度は  
15~20℃



ホウレンソウは直根性で、地上部に比べて根系の広がりが旺盛であり、耕土の深い畑が望ましく、有機質に富んだ土壌が適します。耐湿性は野菜の中で最も弱いものの一つといわれ、湿害(根腐れ)を起こさないよううねを高くするか、排水を図ります。



ホウレンソウの根系

## 発芽のポイント

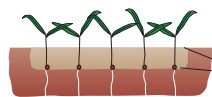
発芽を揃えるコツは、まき溝と覆土が均一であることです。また播種後はしっかりと土を鎮圧し、水をたっぷりかけましょう。春~夏まきでは催芽(芽出し)させて発芽を揃えます。エボプライム処理(発芽促進処理)された種子はそのまま播種します。



ホウレンソウの発芽

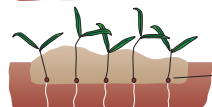
本葉1~2枚のころは、ピシウム菌、  
リゾクトニア菌による苗立枯病に注意

覆土 まき溝 ○



まき溝が平らだと覆土の深さも発芽も揃う

覆土 ×

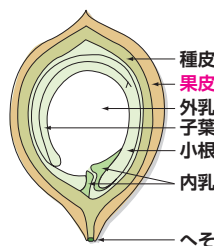


覆土に凹凸があると水が低い所にたまって立枯れを起こしやすく、発芽が不揃いになりやすい

まき溝 ×



まき溝に凹凸があると覆土の厚さが不揃いになり発芽もバラバラ。その後の生育もムラになる



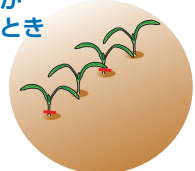
【エボプライム種子とは】

ホウレンソウ種子は、かたい種皮でおおわれており、そのままでは、吸水しにくく発芽が遅れる特性をもちます。そこで、果皮を薄くやわらかくすることで吸水性をよくし発芽そろいを向上させた種子を、タキイでは「エボプライム種子」として販売しています。播種前の催芽処理は不要です。保存性は通常種子と変わりません。

## 間引きと水管理

【間引き】株間が狭いと株数は増えますが、1株の葉数が少なくなります。また葉柄も伸びて徒長し、病気が発生しやすくなります。反対に株間が広いと葉数が多く、葉幅も広くなり1株のボリュームが増えます。ただし草姿が開きやすく、収穫作業がしにくくなります。

1回目  
子葉が  
開いたとき



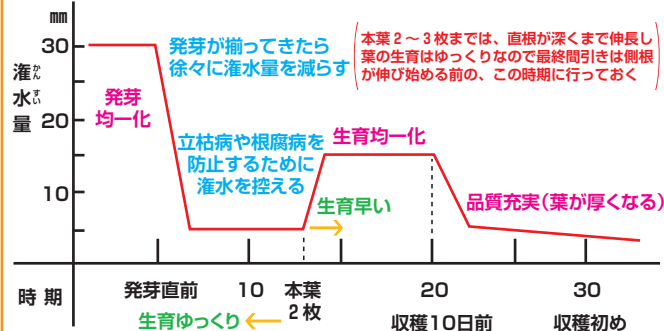
2回目  
本葉2~3枚  
のとき



株間2~3cm程度に間引く 最終株間は5~7cm程度

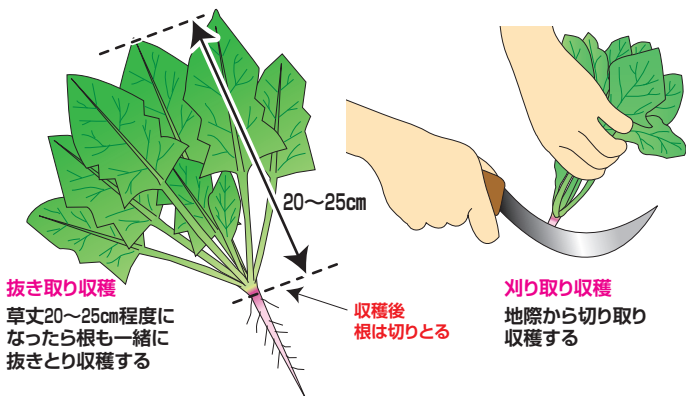
【水管理】

水管理の目安…発芽揃いまでは湿潤に保つが、その後は控え目とする。  
(露地栽培では水分管理が難しいので、目安にして下さい)



## 収穫

ホウレンソウの適期収穫は草丈が22~25cmが目安です。収穫遅れになることが多いので、一度にたくさんまかず必要分だけ時期をずらしてまく「段まき」とするとよいでしょう。



## ホウレンソウのべと病

べと病は、ホウレンソウの地上病害として最も重要な病害です。病原菌は糸状菌(カビ)で、畑での残渣が発生源となるため、連作すると発生が多くなります。分生胞子の発芽適温は8~10℃、平均気温が8~18℃(平均15℃)の多湿条件下で最も発病しやすく、20℃以上では少なくなり、曇雨天が続くと発病しやすくなります。春および秋季のべと病被害の多い時期には、べと病抵抗性品種を利用するとよいでしょう。チッソ過多や密植栽培は被害を助長するので注意が必要です。発生初期からの徹底防除が必要で、発病した場合は殺菌剤を定期的に散布するようにしましょう。

